

鎮痛薬により高齢女性の心筋梗塞・脳卒中リスクが増大

鎮痛薬として広く使用されている非ステロイド性抗炎症薬（NSAID）が心臓血管に与える影響について決定的なデータは少ない。非ステロイド性抗炎症薬は体内の炎症を制御する酵素、シクロオキシナーゼ（cox）に作用する薬剤であるが、この酵素には cox-1 と cox-2 の 2 種類があり、cox-2 が特異的に阻害されると心筋梗塞および脳卒中のリスクが増大する可能性が示されている。そこで本研究では、閉経後の女性において非ステロイド性抗炎症薬を使用することにより、心筋梗塞と脳卒中のリスクが増大するか、また、cox-1 阻害よりも cox-2 阻害によるほうがその傾向が顕著であるかについて検討した。

閉経後の女性 160,801 人を対象に医療データをレビューしたところ、53,142 人が非ステロイド性抗炎症薬を常用していた。心筋梗塞と脳卒中のリスクは、非ステロイド性抗炎症薬を常用していた人では使用していない人より 10%高かった。また、非ステロイド性抗炎症薬をその働きから cox-2 を選択的に阻害するもの（セレコキシブ）、cox-1 よりも cox-2 を大きく阻害するもの（ナプロキセン）、cox-1 を大きく阻害するもの（イブuproフェン）の 3 つに分類し、比較した。その結果、選択的 cox-2 阻害薬および cox-2 を大きく阻害する非ステロイド性抗炎症薬により、心筋梗塞と脳卒中リスクは中程度に増大した（ハザード比はそれぞれ 1.13、1.17）が、cox-1 を阻害する非ステロイド性抗炎症薬ではいずれのリスクへも影響がみられなかった。

今回の研究により、高齢女性においては cox-2 に対する選択性が高い薬剤ほど、心臓血管病へのリスクを増大させる可能性が示唆された。

出典：Circulation. Cardiovascular Quality and Outcomes. 2014; 7(4); 603-610